

日本の遺伝学史を 多角的に探る

科学史研究室 准教授
飯田 香穂里 (Kaori Iida)



Q: いま一番知りたいことは？

科学史は、世界中のあらゆる場所のあらゆる科学活動（科学に関連する活動）を対象にすることができます。その中で、私は特に生物学史に関心があり、その中でもさらに、遺伝学史に興味があります。これまで、育種・遺伝学、優生学、放射線の遺伝的影響などのテーマとその周辺題材を扱ってきました。一番やりたいことは、これらが日本でなぜどのように研究されてきたのか、扱われてきたのかについて、他国との関係や社会的背景などをふまえて明らかにすることです。他国というのは欧米だけを指しません。また、社会的背景に含まれるものは国際情勢などの大きな政治的背景だけではありません。グローバルで重層的なので一生かかっても終わらないかもしれません。

Q: いま課題だと考えていることは？

これは特に新しい課題ではありませんが、非欧米圏の科学史をどのように描くのかは長年の大きな課題です。歴史学自体も科学という概念自体も、西洋中心に形成されてきたものです。歴史学は、男性中心のエリート学問としてスタートしました。大学に女性がほとんどいなかった時代ですね。その後、女性やマイノリティ、欧米出身以外の人々が研究に参加するようになり、研究の内容や方向性も多様化していきました。チームの多様性が発想力に繋がるのは、ビジネスも研究も同じです。多様化したおかげで、科学史の描き方も大きく変化して

きています。でも欧米が参照点ではない歴史研究はまだまだ深めていく必要があります。

Q: この分野の今後の展望について考えていることを教えてください。

今後もグローバルな科学史をどう描くのかについての議論がしばらく続いていくと思います。デジタル資料の質や関連するテクノロジーが発達したことで、多言語読解のハードルも低くなり、研究のスピードも上がることが予想されます。他国の共同研究者とのネットワークも活かして、既存の枠組みにとらわれない独創的な研究をすることがますます求められると思います。

Q: 研究をしてきて一番楽しかった瞬間、難しく感じた瞬間は？

研究は苦しい時もありますが、他のことでは代え難い楽しさがあります。昔の研究者が書いた随筆や日記、産業の内部資料や政府委員会資料など、他人が見たら何がおもしろいのかさっぱりわからないようなものかもしれませんが、読んでみるとあっという間に時間が経ってしまいます。あと、どこかの倉庫に積まれているような、黄ばんだ古い資料も見つけるとワクワクします。でもさんざん調べた雑多なあれやこれやを論文にまとめるのはたいへんです。最後の詰めの段階はいつも苦しいです。でも、これを苦しまないと考察が深まらないので、辛い時は、いい感じに苦しんでいる自分を幽体離脱みたいに上から眺めるようにして乗り切っています。

Q: 趣味があれば教えてください。

趣味はピアノ・キーボード演奏です。ジャンル問わず、バンドやセッション参加、クラシック伴奏…夢だけはいつも壮大です(笑)。

